



編集・発行 日蓮宗 能勢妙見山 広報部 〒563-0132 大阪府豊能郡能勢町野間中 電話 072-739-0329 FAX 072-739-2883

「ひと」とは

倉橋 観隆

「人は人によつて苦しみによつて育てられる」

こんな言葉があります。なぜ私たちが「ひと」と呼ぶのかご存知でしょうか。

諸説ある中で数の数え方に由来するともいわれています。「一、二、三、十」を「ひ、ふ、み」と読みますがこの読み方は日本語のルーツといわれる大和言葉の読み方だそうです。

「ひ」とは物事の始まりという意味で、「と」とは完全な球体を表現しているそうです。これを人間に当てはめると「ひ」という誕生から始まり四割くらいで「ひよ」になり七割で「ひ

な」、十割で「ひと」として完成するというのがその理由です。そして、その成長を促すためには何が必要か。それには「しつけ」が肝心だということなのです。

「しつけは『つ』の付くうちに」と聞いたことがあります。「ひとつ、ふたつ、このつ」と、まさに語尾に「つ」が付く年の間に「しつけ」をすることが重要なのです。そして、十才になりそれが土台となって「ひと」としてスタートするといふのです。「三つ子の魂百まで」とも言われるのもこの辺りにあるのかも知れません。

ところでこの「しつけ」が最近、ことのほか揺らいでいるとは思いませんか。

先日こんな標語を見かけました。

「お母さんスマホ見ないで僕を見て」

色々な方のお話を聞かせていただいたいて痛感するのは「ひと」は育つ時の家庭環境が如何に大切かということなのです。

日蓮大聖人は仏様の教えの根本は「人の振る舞いで候う。賢きを人といい、はかなきを畜生という」と

戒めておられます。

「子育てで親育つ」

まずは大人が自らの行いで「ひと」のあるべき姿を伝える責務があります。「ひと」の最も美しい姿は、胸の前で両手を合わせている姿ではないでしょうか。仏像の多くが合掌する姿なのは「ひと」の完成した姿を表して下さっているからなのです。日々心がけたいものです。

《法華経に学ぶ現代》

～純智庵～

時に一りの

弟子あり

心常に

懈怠を懐いて

名利に

貪著せり

『序品第一』

それじゃあ心は魔に伏す徒

いつかは冬に逆戻り

我が世の春を謳っても

天下を取ったと思ひ込み

名譽と利権に無我夢中

師匠のやり方真似たのか

怠けて得するはずはない

何処の誰とはいわないが

【2月の主な行事】

☆節分星祭祈禱 3日(金)

◎一年間の息災開運を祈り、午前九時より深夜まで祈願法要

☆国禱会・お火焚祭り 11日(祝)

10時 国禱会法要

10時半 お火焚祭り

11時半 車両交通安全祈禱

火伏守り授与・大根炊き供養

※ケーブル&リフト臨時運行

★写経会 12日(日)11時

★月例祈願法要 15日(水)13時

★鷗様月例祭 22日(水)15時

*2月まで茶論はお休みです

【3月の行事予定】

☆報恩大祈禱会 5日(日)10時半

荒行僧出仕。水行、特別加持祈禱を行います

※ケーブル&リフト臨時運行

★写経会 12日(日)11時

★月例祈願法要 15日(水)13時

願い事を書いた兜矢を献納

★星嶺演奏会 19日(日)11時

星嶺で聞くミニコンサート

★鷗様月例祭 22日(水)15時

《送迎車のご案内》

御祈禱・回向を受けられる方は、能勢電鉄「妙見口駅」から妙見山上の間を能勢妙見山から送迎車を出します。

但し事前予約が必要です。妙見山事務所まで。

節分の祈り

桑木 信弘

年末年始を過ぎ世の中の動きも正月気分から通常に戻り、お節料理やお餅、忘年会の楽しいお酒などで胃袋も肝臓も休みなく働き少々疲れ気味、未だ本調子とは言えない方も多いのではないか。そうこうしているともう二月の到来だ。

二月の伝統行事といえは節分であり、大寒という一年で最も寒さの厳しい時期の一区切り。それだけに体調も崩しやすい。そして次は立春を迎える旧正月である。

とは言え春にはまだ程遠い気候だ。朝、本堂で突き刺さるような冷たい空気に思わず震えながらもお経を読む。息は白く手もかじかむ。はつきり言って辛い季節だ。それでも辛さを受け入れつつ神仏に法味を捧げると心身の穢れを祓う爽快

感を覚える。

節分では穢れを祓うお決まりの名言句、「鬼は外福は内」と唱えて豆を撒く。季節の変わり目には鬼が出ると言われ室町時代から続いている行事だ。

鬼は「隠（おぬ）」が転じた言葉らしく、姿の見えぬこの世ならざるものという意味で、年と季節の変わり目、目には見えぬ邪気、鬼を祓う為、穀物の生命力には魔を除く力があると信じられる豆を撒き、心身の調整をして春に備えた。

日本人は昔々から目には見えぬ存在、祖先や万物に神々を感じ敬い畏れては、家族や大自然との繋がりを大切に重んじ、その恵みに感謝をしていた。

食べ物の持つ力が邪気に勝つという考えもそんな考えから出てきているのかもしれない。

「食」といえば、法華経には「法喜食禅悦食」とい

日本人は外国人に比べて虫の声を聴き取る能力が高いようだ。実際、脳の動きを調べて見ると、外国人は音として虫の声を聞くのに対し、日本人は言語として認識するようだ。さらに最近の研究で分かってきたことは、実はこれは日本人の特性ではなく、地域や人

☆☆☆☆星のたより☆☆☆☆

種に關係なく、日本語（とポリネシア語）を母国語として使っている人の特性だという。生まれつきでなく後天的な学習によって世界の聞こえ方が変わるというのは面白い。私たちも仏教を学ぶことで、仏様と同じ感性を得ることができのかもしれない。U.K

う一節がある。仏の教えを聞き実践しそれが智恵として身に付き、内面から自然と生じる満ち足りた心の悦楽を意味する。二月、節分星祭りのこの時期。暴飲暴食は控え身体を助ける食物を選び、大地に恵みをもたらす星の王様に「北極星」の妙見大菩薩様に一心に祈り、蔓延する邪気を退治し、春の活発さに備える心の「食」をしてみれば如何だろうか。

俳 壇

（みのり）

風厳しき庭にいろ紅椿
盆梅のふくらみ初めて窓明し
出行僧髭に雪片あそばせて
児の客に一と日賑はふ春炬燵
春浅し路地に吹き入る風疾し

暦のあれこれ

六曜（一）

暦には、選日などで見られる様々な吉凶判断がありますが、現在の暦でその主役といえるのは六曜ではないでしょうか。

普通のカレンダーや手帳にも記載されているものがあり、一般的に広く認知されて使われているものです。

六曜は先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口の六つが順番に繰り返されるもので、おめでたい事は大安の日、また友引の日はお葬式を避けるなど、今でも多くの人が気に掛けておられると思います。しかし、こんなに広く知られているにもかかわらず、官暦に記載された事はなく、その紀元もはつきりせず、よく分かっておりません。

一般に知られるようになったのも幕末から明治以降と暦の中では新参者です。今回はそんな六曜を詳しく見ていきたいと思ひます。